

図説 医学の歴史

坂井建雄 著

＜書評者＞ 泉孝英（京都大学名誉教授）

650点を越す図版を収載した656ページに及ぶ大冊である。「膨大な原典資料の解説による画期的な医学史」との表紙帯が付けられている。私からみれば、わが国の明治の近代医学の導入（1868年）以来、150年の年月を経て、わが国の人々が手に入れることができた「医学の歴史」教科書の決定版である。医師・歯科医師・薬剤師・看護師・放射線技師・検査技師などの医療関係者だけでなく、一般の方々にも広く読んでいただきたい。豊富な図版は、専門知識の有無を問わず本書を読める内容としている。

教科書としてお読みいただく以上、「飛ばし読みは禁」である。まずは、573ページの「あとがき」からお読みいただきたい。坂井建雄先生の解剖学者・医史学者としての歩みの中から、本書誕生の歴史をたどることができる。坂井先

生のこれまでの多数の学会発表、論文、書籍などから、幅広く資料収集に努めていられることは推察していたが、「ここまで！」との絶句が、本書を拝見しての私の第一印象である。

第1部「古代から近世初期までの医学」、第2部「19世紀における近代医学への変革」、第3部「20世紀からの近代医学の発展」、に記述されていることは、単なる事物・事象の記載だけではない、坂井先生の医学・医療の対する視点・観点、「哲学」ともいえるべきものの基盤の上に、事物・事象の記載が行われている。

私自身は、医史学の勉強を始めたのは定年退官以後、坂井先生のはるか後輩である。私なりの視点から、明治時代のドイツ医学の導入、第1次世界大戦後に始まる米国医学の進出、そして、第二次大戦後、国民皆保険制度の成立によ

る日本独特の医学の形成過程をたどり、論を呈してきたが、本書第24章「20世紀以降の日本の医学」における坂井先生の記述との対比から、私の視点・観点の再検討を試みたいと考えている。また、第26章「現代における医史学の課題」において記述されているが、「医療の社会化を前提とした医学研究のあり方」は、今後大きく問われるべき課題である。

終わりに、本書は、川喜田愛郎先生の『近代医学の史的基盤』（岩波書店、1977）に次いで、私が大きな感銘を受けた書物であることを記しておきたい。

● B5 頁656 2019年5月
定価：本体5,800円＋税
[ISBN978-4-260-03436-4]
医学書院刊